

奈良先端科学技術大学院大学  
附属図書館アドバイザー委員会（第9回）報告

1. 日 時 平成16年1月15日（木）14時00分～17時00分

2. 場 所 奈良先端科学技術大学院大学事務局3階大会議室

3. 出席者

<アドバイザー委員>

雨森 弘行 (名古屋女子大学常務理事)  
今井 秀樹 (東京大学生産技術研究所教授)  
田屋 裕之 (国立国会図書館関西館事業部電子図書館課長)  
寺田 浩詔 (高知工科大学副学長)  
根岸 正光 (国立情報学研究所 学術研究情報研究系 理工系研究情報研究部門・教授・国際研究協力部長)  
松村 多美子 (椋山女学園大学文化情報学部教授)  
美濃 導彦 (京都大学学術情報メディアセンター教授)  
山本 修一郎 (株式会社NTTデータ技術開発本部副本部長)  
(欠席)  
土屋 俊 (千葉大学文学部教授)  
宮原 秀夫 (大阪大学総長)

<大学出席者（陪席等）>

鳥居 宏次 (学長)  
山口 英 (附属図書館長、情報科学研究科教授)  
砂原 秀樹 (附属図書館運営委員、情報科学センター長)  
西谷 紘一 (附属図書館運営委員、情報科学研究科教授)  
湊 小太郎 (附属図書館運営委員、物質創成科学研究科教授)  
垣内 喜代三 (附属図書館運営委員、バイオサイエンス研究科教授)  
飯田 元 (附属図書館運営委員、情報科学センター助教授)

森 浩禎	(附属図書館運営委員、遺伝子教育研究センター教授)
藤川 和利	(附属図書館研究開発室助教授)
森島 直人	(附属図書館研究開発室助手)
河合 栄治	(附属図書館研究開発室助手)
井之上 純孝	(総務部長)
小島 榮基	(研究協力部長)
末永 壽男	(会計課長)
藤原 彬	(施設課長)
中嶋 昭雄	(研究協力課長)
前田 和丸	(学生課長)
松原 康夫	(学術情報課長)

(配布資料一覧)

1. 附属図書館アドバイザー委員会委員名簿
2. 奈良先端科学技術大学院大学附属図書館アドバイザー委員会要項
3. 奈良先端科学技術大学院大学附属図書館アドバイザー委員会(第8回)報告
4. N A I S T 附属図書館(電子図書館)の現状
5. 図書館改修後書架等配置図面
6. プレゼンテーション資料
7. N A I S T 電子図書館レポート2003
8. 奈良先端科学技術大学院大学電子図書館概要
9. 奈良先端科学技術大学院大学2003-2004ガイドブック

議事に先立ち、館長から開会の挨拶が行われた。引き続き学長から挨拶の後、アドバイザー委員の紹介、及び本学出席者、陪席者の紹介が行われた。

4. 議 事

(1) N A I S T 附属図書館(電子図書館)の現状について

館長から、配布資料6に基づき、図書館利用状況、電子化進捗状況、

電子化資料へのアクセス状況、電子ジャーナル契約状況及び図書館閲覧室の改修についてなど、現在の附属図書館の現状を表すさまざまなデータをもとに報告があった。

また、昨年度の課題における達成状況の報告及び附属図書館将来構想についての説明があった。

## (2) 意見交換

意見交換（提言・意見）の概要

各委員から、附属図書館（電子図書館）の将来構想やこれまでの活動などについての意見等が寄せられた。

委員の主な意見等は、次のとおり。（◎印付きは、アドバイザー委員からの意見等）

### [図書館機能と大学情報基盤機能の併合及び組織構造]

◎ 情報発信が今後大事になってくるのは明らかですが、図書館の従来の機能と電子化のこういう機能をマージさせていくことはいいのか悪いのかということ最近考えています。

ここでもおっしゃっているように、古いのは古いまま残して情報館を作ろうというような発想がありますが、反面、従来の図書館とこういう情報的な図書館を融合させて、何か新たな文化衝突などの中で新たなことが生まれてくるという気もするので、我々もどうすればいいのか、今、いろいろと議論をしている状況です。規模が大きくなるとどうしようもないところがあり、ちょっと動かすにもすごく手間がかかるので、ここで実験をいろいろやってもらい、どういう方向がいいのかということをお願いしたいと思います。

◎ 情報館の構想は私も大変結構だと思うのですが、その反面、図書館サイドの立場から言いますと、こういう電子化というようなものが進行している中で、もう少し従来からの図書館職員の意識改革も含めて、少しカルチャーショックかもしれないけれども、荒波にさらされるような環境の中に置かれる立場になってもよいのではないかという

気もします。そういう点から、例えばこちらの大学の図書館の今後の方向性として、非常に高度な情報サービス、「カスタマイズされた情報サービス」とおっしゃいましたが、そういったサービスを提供していくような方向にむかうのは非常に重要なことだと思いますし、それに何らかの形で図書館職員がかかわっているということが必要だと思います。

実際には、一般的な大学図書館ではこれまであまりなされてこなかったのですが、実は私がかつて勤務していました医学情報センターでは、お話のありましたマイブラリーのような、いわゆる個人別のプロフィールを作り、そして積極的に図書館側から関連情報等を流していくということは実はもうすでに行っていました。

それは 20~30 年前のことであり、マニュアルでなされていたことが、こうしたいろいろなソフトも開発されて、そして電子的な形式でなされるということだと理解しましたし、そういうことはますます積極的にこういう環境のもとで進めていかれるべきだと考えています。

◎ 図書館組織の在り方のことですが、この程度の小規模の大学であれば、情報科学センターと合体して、名称は「基盤センター」または「学術情報センター」等、名称のつけ方は様々であろうかと思いますが、やはり機能を合体して進めていったほうがよいのではないかと思います。

それは例えば人事管理の面から見ても、いろいろな経費的な観点から見ても、やはり高次的に運用ができるのではないかという気がしますし、私どもでも従来在った情報科学センターと図書館とを合体して学術情報センターにしたのですが、一つだけ明確に言えることは、以前あった管理上の問題が人事管理の面で非常に解決されていることがありますのと、様々な資源を有効に活用していくという点から見ると、そのほうがベターであるということとは言えるのではないかと思います。

◎ ごく単純に、要するに同じような機能を果たしている組織が複数存在していて、人事管理の面でも、あるいは人件費の面から見ても、資源活用の面から見ても、かなり共通している、合理化の可能な部分

があります。そういうことが幾つか明らかであれば、それは複数存在させておくよりは合体させたほうがベターだということです。

その先のいろいろな問題、後の問題も出てくることは事実です。しかしそれは、やってみてだめだったらいろいろな改善を図っていけばいいのではないかという割とラフな判断で進めたということがあります。

◎ 最近の世の中の企業の流れでいくと、もうサービスを持つことはやめてアウトソーシングをして利用する。これが可能かどうか分かりませんが、予算が4割カットされるとすると、4割カットされ大変であると思うと同時に、次の3年間でさらに減額される可能性もあるのではないかと思います。とすると、一般論として考えると、持つのはあきらめるところが出てきます。では全部なくなるかということそうではない。アウトソーサーとして逆に受けるところがない限り、電子図書館、あるいは図書館機能は維持できないということであり、そういう意味でも最終ゴールを意識して、この組織をどうするかということがあります。

あるいは、こここそが日本、あるいは西日本の電子図書館機能を全部受ける、そうすればビジネスとして成立します。あるいは、奈良先端大でできなければ、奈良先端大の子会社か何かを作り、そこで派遣業をやるというようなアイデアもあるかもしれないので、そういったことまで含めて、来年から行うとかいう話はないと思いますが、そういうゴール形態も意識されていくといいのではないかと思います。

◎ 具体的に、プレゼンテーション資料（基本構想：資源割り当てプラン）には、「情報科学センター等との協働体制の確立」と書いてありますが、私の行った大学は今年3月で丸7年経過しようとしています。10年ぐらい前ですから、ネットワークのプラットフォームは全学の情報基盤と考え、事務システムも図書館のシステムも全て同じ物理的プラットフォームで、その上に乗るシステムも全学で一元的に管理しました。ここよりもっと小さい大学ですから背に腹は変えられない面もありましたが、組織的には、おそらく、全学の情報機能、発信も含めて情報

機能を考え直してみて、本の形で情報を抱えている部分が図書館だというふうに考えればおのずと解はあるのではないかと思います。

先ほどおっしゃったようないろいろな芽があり、逆にネットワークを使ってどんなことができるのか、その中で自分のところではどんなことができるのかというような発想で大学の情報基盤を考えると意外にすっきりしてくるのではないかと思います。

#### [リファレンスライブラリアン]

◎ TAによるリファレンスサービスの提供ということをおっしゃっていましたが、実は大阪大学の図書館は昔から大学院生をリファレンスサービスの管理下に置いてやっているということもありますし、この方法は非常によろしいのではないかと思います。ただ、どういう時間帯にどのようにTAを配置するかというのは、TAの部屋は、利用制限、活用制限のようなものとの関連もあり、当然そのタイムシェアリングを考えていかななくてはならないだろうと思いますが、そういうことも実行して、その成果を是非発表していただければ他の大学にとっても参考になるのではないかと思います。

職員の採用についてですが、奈良県の人材派遣会社がどの程度発達しているかよく分かりませんが、名古屋の場合には今、非常に派遣業が盛んになっていて、抱負な人材がプールされています。

うちでは職員の採用にあたって、実際に派遣会社から派遣していただき、最低3か月以上実務をやってもらう、その上で、全員で評価をして、よしとなったら採用するというやり方を行っています。結果的に様々な観点から長い時間をかけてチェックをし、評価をするということは非常にベターではないかと思います。

こちらのほうも必要とされる職員像というところをこれから考えていかれることになるのでしようけれども、できるだけ広い範囲の人材プールの中から採用するということをお考えになられたらよろしいのではないかとアドバイスをしておきたいと思います。

◎ 主題領域の専門性は、今後の非常に大きな問題だと思います。現行の制度では恐らく不可能に近いということも言えるわけですが、そ

れを解決する方法としては恐らく二つあると思います。その一つは、これはもうすでにアメリカの大学や欧米でよく行われていることで、それはこちらの図書館側ではなくて養成制度をやっている大学の問題ですが、まずジョイントディグリープログラムを行うべきだということです。

図書館情報学科とほかの生物や化学、あるいは美術の学部とジョイントで、その分野の専門性を多少とも基礎知識ぐらいは持った情報専門家を養成する。それはもうすでにたくさん行われていることですし、また専門として、イギリスのメトロポリタン大学では基本的にメディカルライブラリアンやミュージックライブラリアンの養成のコースを開講しています。ですから我が国でもこれからはそういう方向性に行かなければいけないのではないかと考えています。

第2点としては、現在もこれまでの司書のトレーニングを受けたかたがいらっしゃるわけであり、その人たちをどうするか、これは差し障りが多少あるかもしれないことなのですが、それはトレーニング、研修をしていくしかないと思います。もちろん各図書館職員のモチベーションにもよりますが、しかしながらそういう何らかの機会を設けていくということも必要ではないかという気がします。

それはこれからの電子司書、専門性のある情報サービスを提供するに当たっての図書館職員の在り方、司書の在り方ということになるかと思っています。

### [授業アーカイブ]

◎ 授業のアーカイブというのは、何のために、誰のために、またどれだけ利用価値があるのかということをもう少し調査、議論されたほうがよいのではないかと思います。

ビデオストリームを中心にすごく大がかりなシステムを作ろうという形で、実際にやってみると、学内に対してはあまり利用価値がなかったりします、本当に要求があるのかということの評価してからでなければ、そこばかりに投資をしてしまうとお金がかかる割には役に立たないシステムになってしまい、もっと違うところに気を配ったほうがよいのではないかという話になる懸念があるのではないかと思います。

す。

講義に出ていない人がちょっと見たいとか、また我々はほかの先生の授業はどのようなものであるかということをおもひ知らないので、我々にとってはすごく面白いのです。見る価値はあるのですが、学生にとって、本当はどうであろうというのは、その視点からも調査をされるほうがよいのではないかと思います。そういう調査をされて、大学院レベルではそういう需要があるのだということをおもひただけると我々もすごくありがたいと思います。

### [電子保存図書館]

◎ 一つの大学だけで電子化をしていくということはこれから限界になるだろうというお話がありましたが、保存図書館と電子化とを兼ねた一つの大きなセンターみたいなものを構想するというおことについて、それは良い点と問題点と両方あるのではないかというおこもします。

個々の大学図書館がこれからどんどん継続的に予算を使って電子化をしていくということは非常に限度があると思うのですが、例えばイギリスの場合は「Distribute Electronic Resources」プログラムというのをやっています。分散型であって、各大学図書館でそれぞれに電子化したものがあります。けれども、その「それぞれに電子化したもの」と言った場合に、イギリスの場合は電子図書館機能のアプローチが我が国とはかなり違います。

我が国の場合は、図書館の所蔵している資料を電子化するところからスタートしたわけです。こちらの大学もそうでしたし、文部科学省の方針がそうであったわけですが、欧米の場合には、電子図書館機能というものは、持っている資料を電子化するのですが、それは実際に授業で使う資料、実際に研究で使われる資料で、絶対に研究と教育との関連においてしか行いません。だから、非常に早い段階で例えばラテンの古典を電子化するというようなことを行っています。

電子化というのは科学技術の分野と思われがちであったわけですが、そうした人文科学の教育のために、古典やシェークスピアなどを電子化する、それにアノテーションのようなものをつけたりコミノートをつけたりするというおこと、電子化をする資料がかなり限定的に教



育・研究に密着しているということ、結果としてほかの大学との重複はそれほどないということから、全国的に見た場合に、それが分散型でネットワーク化した場合に有効であるということが言えるのかと思います。

それに対して我が国の場合は、もしかしたら非常に重複が出てくるかもしれないとか、そういうようなことがあると、おっしゃるような一つのセンター的なところで集中的にやる、集中的にサービスもするアーカイブもするという考え方、そして保存も兼ねるといえるのはいい構想であると思います。

ただ、そういうセンターをどこがやるのか、新たなセンターを作るのか、どこかの一機関がやるのか、などといった現実的な問題は残るかもしれません。

電子化に関連しないでも、保存図書館の構想は出たり入ったりを繰り返して、もう何十年もきているわけで、なかなか実現しないというのは、どこがやるのかという問題、国会図書館も似たところもおありになるわけです。あちらは任務として、アーカイバルに、文化の保存のために、全部を電子化していらっしゃるところがあるので、全国的に見た場合に、そういうところが一方であるということ踏まえて考えなければならないのではないかと思います。

◎ 外国雑誌の一括購入、特にタスクフォースで買ったものについては、先方の出版社との了解をなるべく取りつけて、アーカイブ的に我々(NII)のサーバーに乗せて国内的に効率的にアクセスできるようにしていくということで、一昨年予算がつき、準備をし、Kluwerなどが出てきているという状況にあります。

それは外国雑誌を購入するほうの話ですが、一方、今のようなお話では、例えばオックスフォードユニバーシティプレスあたりからは、保存の部分については、今のような関連もあり、我々のところでやらないかという話もきており、積極的に受けていこうということが今進行しつつあります。

外国の雑誌をアーカイブ的に世界何局かの中の一つで受けていこうということですが、国内の雑誌についてはどうするか、特に国内の雑

誌の電子化はあまり進んできていないという状況があり、これを、「S P A R C / J A P A N」と称するプロジェクトで、これも予算がつき、今年度からやり始めて、そう多くの数ではありませんが、支援をしていこうとしています。

それをどこに置くかというのは、J S TのJ - S T A G Eに置くというのも一つの選択肢ですが、一方、アーカイブ的にはどうするかというのは大きな問題で、外国からのそのような話もあるので、我々としては国内誌についてのアーカイブも積極的に考えていく必要があるということで取り組みつつあります。

今後、我々として何かできることがあれば、少なくとも外国雑誌系が現実に進みつつあり、そのある意味では国内版の話だと思いますので、これは大学図書館協議会等との話し合いの中でまとまっていく、進められるものもあるのではないかなと思います。

もう一つ、大学からの情報発信をこの図書館が主体となって担おうという、これも今非常に重要な部分で、各図書館でも進められていますが、この種のことを、我々の研究所の事業系で何とかしてお手伝いできないかと、研究紀要ポータルとか、メタデータデータベースとか、幾つか事業を設定して、各大学図書館に対して、ある種の集中化した部分での効率性を追求するというような仕掛けを用意することで、これはすでに動き出しています。できれば積極的にこういうものも利用できる部分は使っていただきたいと思います。

それから、こういうふうにしたほうがよろしいだろうというご提案についても、是非とも我々のほうへむしろ言っていただいて、共用部分についてはそれでよくしていきたいと考えています。是非有効にお互いに使っていければと思っています。

◎ 電子化された資料を次の世代にどのようなにつなげていくのか、そういう責任があるのではないか、電子化されるべき資料は山のようにあるというようなお話の中でアーカイブのお話をなさったわけですが、これはなかなか簡単な問題ではなく、実に大変な問題であると思います。

通常考えてみて、電子情報がどうして保存されないのか、電子化し

たから保存されるということでは全くなく、電子化したら保存が非常にしにくくなると考えるのがむしろ普通であると思います。

まず、電子化をする場合にどういうOSの環境の中で電子化をするか、どういうフォーマットがよいのか、どういうアプリケーションソフトで再現するのか、そもそも媒体自体がどのように保存できるのかできないのか、細かく言えば、バージョンの違い一つによってデータが再現したり再現しなかったり、そういう山のような課題があって、今、電子化したものについても、5～10年後はそれが見られなくなるということは可能性として非常に高く、電子化と保存というのは全然関係がないと考えるべきだというのが一つあります。

今、世の中に流通している大量の電子情報は、今後5～10年先、もう少し考えても、100年先にこれは保存できるのかどうかという点で言いますと、非常に危うい状況だと思います。

昨年、ユネスコの32回総会において、デジタルの危うさからデジタル文化をどのように保存するのか、「デジタル文化遺産保護」ということで憲章が出ています。併せてユネスコのほうでガイドラインも作成しています。各国で取り組みを進めていますが、例えばアメリカではNDIIPPというプログラムが動き始めています。非常に生産性の高い優秀な研究者のおられる奈良先端大だと思いますが、これはなかなか簡単には取り組める話ではないだろうと思います。どのように取り組むのかというのは非常に重要な話だと思いますが、この動き自体はかなり国際的な動きにもなっていますので、単純に電子化したらいいいとか、個々の図書館の中でやるというようなことではなく、広いパースペクティブの中で押さえていくべき問題であるという気がします。

#### [電子図書館機能の高度化・パーソナル化におけるセキュリティ]

◎ これからいろいろなことをやろうとされている中で、そのときにはどうしてもセキュリティの問題は非常に大きな問題として出てくることは間違いないと思っています。

R F I Dにしてもプライバシー問題が出てくるし、パーソナライズするともっと大きなプライバシー問題が出てきます。それに対してど

うやって安全性を保つかという問題、それから個人情報の問題が出てくると思います。

そういったさまざまな問題があるわけですが、幸いにしてここは比較的にな小さな閉じられた世界でやろうとされています。もちろん将来は外に向かっていくのだけれども、とりあえず狭い世界でやる、そうすると実験としてはできていくのではないかなと思います。

セキュリティを考える上で、あるコミュニティの中でそれがきちんと理解されるということは非常に重要で、それがうまくいかないと結局は広がらないのです。そのあたりを実験的にでも行ってもらい、こういうモデルでこのセキュリティシステムは、日本国内、あるいは全世界に広めていったらいいというそういうメッシュみたいなものができるとう非常にありがたいと思います。

暗号を使っても使わなくても分からなければ同じだという話もあり、みんなに理解をしてもらうということが重要だということがあります、そのあたりがうまくできればと思います。

#### 〔社会貢献及び地域との連携〕

◎ 私はこれまでも地域社会貢献ということを強調してきたので、それが本格的に取り組まれるというような構想が表れていて大変うれしく思います、これからは大学としても社会貢献ということが大学の使命の重要な柱にもなってきていますし、また公共図書館側も、生涯学習機能を充実していくことを考えた場合に、大学図書館の支援なしにはそれを実現していけないということも明らかになってきていると思います。

今度、東海地区の愛知・岐阜・三重・静岡の4県が、国公立の大学図書館と公共図書館とがお互いに連携を取り、組織立って事業を具体的にやっていくという構想が固まり、名古屋大学でその事実上の準備委員会が発足したわけですが、これまでも形式的な各県単位で図書館協会や協議会という組織があって、そこでお互いの関係者が集まって意見交換や情報交換をすることは行われていましたし、現在も全国各地で行われているのですが、具体的な事業をコラボレーションという形で進めていくのであれば実は成果は上がらないのです。

そういう点で、今日のご説明にもありました生駒市との連携、こういうことが実現していくと非常によく、他の地域に対してもインパクトを与えることになるのではないかと、また、そのノウハウを周囲に無償で提供していただきたいと思います。

もちろんこの生駒市という特定の市との連携ということ皮切りにして、できれば県内の国公立の大学と公共図書館との間で、さらには奈良県だけに限定せずに、例えば西日本に対して声をかけていくという動きを、こういうノウハウを持っているところが声を大にして働きかけていくことも大変大事なことではないかと思えます。学内のシステムを構築していくことも大事ですが、併せて社会貢献を本格的にやっていただきたいと思えます。

#### [電子図書館が果たすべき役割と今後の方向性]

◎ 最初はこの電子図書館の話は電子化がすべてで、電子化をすればよいという形だったものが今はどんどん変わってきて、電子化の部分はむしろ小さくなってきました。

そうすると、一体今後の在り方はどうなるのかということがあり、理念として今後、図書館はどういうものであるべきで、あるいは電子図書館とはもうすでに言えないかもしれないけれども、電子的な情報基盤というのはどういうものであるべきであってどのように評価されるべきものなのか、何がよければ何がうれしいのか、カスタマーサテイスファクションということをおっしゃいましたが、それだけで本当にいいのか、学生が何となくいい気持ちになったらいいのか、それだけでは多分いけなくて、やはり学生のトレーニングのようなものもあるだろうということも考えているのですが、そういったことを整理して考えてみる必要があるのではないかと思います。

学会の場合も似たようなものですが、電子化の問題にさらされており、しかも電子化に伴って会員数が大幅に減ってきているということもあって非常に問題が生じており、非常に強い危機感を持っています。学会というのはメンバーがいなくなればなくなってしまうのです。けどこの図書館はなくなるならない、誰も使わなくてもなくなるならない、それではよくないので危機感を持ってやっていただきたいと思えます。

◎ 意欲的なアイデアがたくさんありますが、ただ、そのときに多分共通するキーワードとしては、恐らく研究活動とのコラボレーションの中で電子図書館を位置づけたいということだろうと思います。逆に、例えばマイライブラリーにしても、日々の研究記録をつけるようなグローバル機能のようなものまでもないと、どこかで止まってしまうことになります。とすると、取りかかりとして小さく始めるというのは大変結構だと思いますが、最終ゴールとしてどこまで電子化するのか等、そういったゴール設定を適切にするとともにこのプロジェクト自体の価値が増すであろうと思いました。

◎ 学会においても、学会誌、特に論文誌の電子化ですが、今やっているのは全部、紙の媒体の域を出ない、検索、インデックスづけにしても紙にマーキングするのと似たようなことなのですが、要するに電子化しないとできないようなことは何かないかなと、いろいろ考えたりしています。多次元空間にわたるようなデータや見る人が自由に加工できるオリジナルなデータ構造など、紙の媒体ではできないデータ構造をどう提供していくか、それをどう共有するツールを作るのかということに尽きるのではないかと考えています。

例えば有機分子の立体構造を回して見られるのは、恐らく今は市販のデファクトのパッケージがあって、それなら読めます。先ほど田屋さんがおっしゃった問題にも関連するのですが、そういうコマース的な、いつ消えるか分からないようなデファクトのソフトに頼っているのが本当にいいのかどうかということ、そういうのは大学図書館あたりできちんと一緒に考えておくべきことではないかと思っています。

#### [情報資産としての知財管理]

◎ 大学が情報発信をしようとするときに、その発信機能が全部図書館にあることに対して私は懸念を持っているところがあります。図書館というのはあくまで公共的なところで無料公開の場所であり、情報というのはすごく微妙なところで、これは売る価値があるかもしれな

いという話があります。そうしたときに、図書館でそういうものを扱うのがいいのかどうかという議論を我々のところでは少しやりかけています。つまり、知財センターを作って、そちらは大体知財になるようなものを集め、図書館は公的なものだからある意味フリーで自由に閲覧していいものを集める。それを大学の先生がどうするかは別問題です。ただ、そういう二つの発信の窓口が必要になるのではないかという気がします。

そういう意味で、図書館に全部集めていこうというのは一つのいいアイデアだと思うのですが、今後そういう話が出てきたときにどう整理をするのかということは難しい問題になるので、最初から少し考えておいたほうがよいかと私自身は思っています。

